

別紙 4

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 越境する身体

—華語映画における妖怪表象に見られるクィアネスの可能性—

氏 名 門 千行

論 文 内 容 の 要 旨

華語ファンタジー映画は、「神怪片」あるいは「魔幻片」、「奇幻片」と呼ばれ、名称に関わらず、しばしば幻想性と虚構性を備える「妖怪」を描くのである。20年代に芽生えた華語妖怪主題映画は、主に中国の古典文学から取材して作られ、単なる好奇心のために可視化された歴史的な幻想物ではなく、時代に渡り、三つの役割を果たしてきたこれらの映画は、国民共通の認識に構築される中国古典文化の象徴物であり、ジェンダーやセクシュアリティの規範を越境する行為を可視化する重要な場所であり、そしてまたは、商業的に成功し、中国の映画産業の発展にポジティブな影響を与えた代表作である。

数多くの研究は、妖怪表象に着目し、それがいかに時代背景や文化、政治などのコンテクストの影響によって変化してきたのかを考察した。しかし、妖怪表象における様々な要素の混在によって現れる越境と異なり、妖怪を表現する行為をめぐる具象化と可視化の問題はまだ着目されていない。そのため、本研究では、ジェンダー学の視点から妖怪を演じる俳優の身体が映画における越境的な表現をよりダイナミックな文脈に位置づけ、ジェンダー、歴史、地域との関係を探り、中国の伝統文化において看過されてきたこの表現の系譜を明らかにし、この表現手段が異なる文脈を横断したときに生じる「ずれ」を検討したい。

妖怪の存在を描写することは、常に境界の存在を知らしめ、その一方で、境界を越えてはいけないことを人々に警告している。このような妖怪身体やアイデンティティを越境できる妖怪を表現するために、俳優の身体は極めて重要である。妖怪を演じる俳優の身体は、観客にとって自身を測る参照物であり、彼らの身体を通して観客が自分と妖怪の差異を把握し、自分の身体やアイデンティティが明確になっているのだ。

近年の映画は、特殊メイクやデジタル視覚効果などのテクニックを駆使し、俳優らの身体をグロテスクやスペクタクルの方向に改造し、正常な状態から逸脱した状態を観客に見せるのであるだけでなく、デジタル技術に基づく視覚効果以外に、メイクアップ、コスチューム、声の吹き替えとモンタージュなどの手段を用い、俳優の身体を通し、単なる男女の二項対立という「規範的な」ジェンダー図式を再確認するだけでなく、むしろ強制的異性愛規範に基づく男女二元論を出発点にして、既存のジェンダーやセクシュアリティの規範をさまざまなレベルで、さまざまな方向に向かって越境している。

こうした妖怪表象を産出するプロセスでは、妖怪、俳優、観客はそれぞれの役を務めている。妖怪という幻想物は、各時代の人々が歴史や文化、社会における「非規範的な」物事に対する認識によって構築される記号的な表現である。この「過剰・逸脱・異常」を象徴する記号的な表現（妖怪）は、映画の中で俳優が演じることによって具象化され、可視化される。そしてパフォーマンスする俳優は、身体の介入によって、ジェンダーやセクシュアリティの規範を越境する行為を観客に見せる。90年代以降、大量の映画が繰り返して上映されることによって、「非規範的な」身体表象は、妖怪イメージという媒体を通して具象化され、可視化されるため、ジェンダーやセクシュアリティの規範、及びそれを越境する行為が観客たちの目の前に暴かれるようになる。そのため、90年代以降の華語妖怪主題映画は、俳優のパフォーマンスの介入によって、単に熟知されるキャラクターが再び映像化されるものだけでなく、観客が映画におけるジェンダーやセクシュアリティの越境的な身体表現を考察・評価する場所でもあり、クィアネスが可視化にする媒体でもある。

一方、ナショナリズムとエンタテインメントという二重カバーの下で、華語妖怪主題

映画は、中国の伝統文化を継承する担い手という役割が期待され、商業的な成功が市場に望まれている一方、越境的ジェンダーやセクシュアリティ表現が視聴的なエンタテインメントとして見做されるゆえに、厳しい検閲の隙間に秘めやかに表現できるようになる。そのため、華語妖怪映画におけるジェンダーやセクシュアリティの越境的な身体表現がもたらすクィアネスは、観客に政治性が備えない「逸脱」する機会を与えている。

本研究は以下のような五章構成によって、俳優の身体への介入がもたらす「非規範的な」身体や越境的ジェンダーやセクシュアリティの表現に着目し、妖怪表象はいかに観客に「歴史」を振り返る機会を与え、一時的に「正常」から逸脱を体験させるのかについて論じる。

第一章では、中国において最も有名な民話の一つ、「白蛇伝」作品の歴史を辿り、この作品における青蛇のジェンダーの変遷を取り上げ、中国の妖怪の歴史に隠されていた小さい歴史について考察する。この断片的で、多様で、継承性がなく、価値が低い歴史が、その背後にある社会文化的イデオロギーを現しており、当然視されてきた白蛇を中心した大きい歴史への挑戦、という可能性を示唆する。

第一章の分析を踏まえ、妖怪を演じることと「非規範的な」身体表現の関連性を確立する。つまり、妖怪表象における越境的ジェンダーやセクシュアリティの表現は、単なる90年の「西洋」からの影響で出現したものではなく、このような表現はすでに古代中国の妖怪表象にその痕跡を見出すことができる。この関連性を成立させた鍵は、妖怪を演じる俳優の身体である。第二章から第五章までは、妖怪主題の映画作品では、いかに俳優の身体を通じて越境的ジェンダーやセクシュアリティを表現し、観客に一時的な逸脱を体験させるのかを考察する。本研究で取り上げる作品例は、90年代以降に上映された、中国古典文学における妖怪物語を土台とする映画化作品、二次創作の作品、及びパロディ作品である。

第二章では、『チャイニーズ・オデッセイ』シリーズ1と2（大話西游之仙履奇縁、大話西游之月光宝盒）（ジェフ・ラウ 1995）、『チャイニーズ・オデッセイ3』（大話西游3）（ジェフ・ラウ 2016）、『西遊記リロード』（情顛大聖）（ジェフ・ラウ 2005）、

『西遊記～はじまりのはじまり～』（西遊・降魔篇）（チャウ・シンチー 2013）という五つの映画作品を考察する。小説『西遊記』における「動物への変身」という妖怪の表現手段は、いかに文学、演劇、映画を横断しながら、パロディ化される際に、ジェンダー・パロディ表現を促したのかを明らかにする。

第三章では、2001年に香港で上映された『鐘無艷』という映画を取り上げ、この映画はいかに異性装や性転換などの手段を通じ、「規範的な」ジェンダーを越境するキャラクターを描写し、越境的セクシュアリティを表現することにより、歴史を嘲笑しながら、転覆的に歴史を読み直したのか、またはいかに観客を納得させ、観客を一時的に逸脱させるのかを検討する。

第四章では、2008年に上映された『画皮 あやかしの恋』と、2012年に上映された続編『妖魔伝 レザレクション』における女優の身体表現について論じていく。この2本の映画は、いかに妖怪という名の下に、新たな妖怪イメージを表現し、複数の女優の身体を一つ集合体として利用することによって、規範からの逸脱可能性を帯びた女性の身体表象を作り上げたのかを説明する。

第五章では、1993年に上映された『青蛇転生』の中に描写された妖怪であることを楽しめる青蛇についての「非規範的な」身体、欲望、及び内包されるジェンダーやセクシュアリティの表現を分析し、これらの表現が観客の共感をどのように喚起したのかを考察する。越境的なセクシュアリティの表現は、青蛇を通じて具象化され、可視化される一方、観客に日常の規範から一時的な逸脱体験を与え得ることを主張する。

以上の内容は本研究の主な内容である。こうして越境的ジェンダーやセクシュアリティ表現を通じて描写される「非規範的な」身体表象は、二つの機会を観客に与えた。一方では、越境的ジェンダーやセクシュアリティを表現する妖怪表象は、観客にこれまでの「慣習的な」妖怪表象を再考察するための参照元を与えており、観客に「慣習」を作る「歴史」の再認識・再考察を促し、権力関係が妖怪表象の「歴史」に反映されていたことを暴く機会となる。他方、妖怪主題映画を見ている観客は、スクリーン中のファンタジー世界まで到達することはできず、映画館の外のリアル世界にも戻れないという、この二つの世界の隙間で「正常」から逸脱の状態を体験することができる。

また、「非規範的な」妖怪は、越境的ジェンダーやセクシュアリティ表現を提示するだけでなく、「習慣的な」視座の図式をも揺れ動かしている。上映の際、公的な許可の下に、観客は秘かに公的に期待されない解釈を行う、すなわち、越境的ジェンダーやセクシュアリティを認識し、「非規範的な」存在である妖怪に共感する。